

高橋 理著

## 『ハンザ「同盟」の歴史

——中世ヨーロッパの都市と商業——』

(創元世界史ライブラリー)

創元社 二〇一三・二刊  
四六三〇四頁 二二〇〇円

本書は、著者が一九八〇年に教育社歴史新書の一冊として著した『ハンザ同盟—中世の都市と商人たち』を増補改訂して出版したものである。近年、ハンザに関心を抱く研究者により「日本ハンザ史研究会」が立ち上げられ(二〇〇二年)、定期的に研究会が開催されているが、著者の高橋理氏はそれ以前からハンザの研究に取り組み、その成果は幾つもの質の高い専門的論文として刊行されている。ハンザとは、中世後期にもドイツの都市や商人が寄り集まって形成された商業上の利益の維持・確保を目的とした連合体である。しかし、その実態はつかみどころがなく、その誕生、消滅期を確定することはできない。ハンザに加盟していた都市(ハンザ都市)が幾つであったかということに対してさえ、はっきりと答えることは難しい。本書は、そのハンザという曖昧模糊とした組織の誕生から消滅までを著者の長年の研究成果をベースにしてわかりやすく解説したものである。

本書のおもな部分は、序章と本論八章、それに終章からなる。叙述の中心は盟主リュールベックに置かれる。以下、本書の構成に

沿って内容を紹介しよう。序章の前に短い「はじめに」が置かれるが、ここでは著者の見聞をもとにハンザのつかみどころのなさが紹介される。序章「ハンザ「同盟」とは何か」では、ハンザ成立の背景となる中世ヨーロッパの商業と都市の成長をめぐる諸事情を踏まえたうえで、ハンザとはなにかということが立ち入って解説される。「同盟」という言葉に鈎括弧が付されている理由もここで説明される。第1章「ハンザの前史」、第2章「商人ハンザの時代」、第3章「都市ハンザの成立」では、ハンザの誕生から対デスマーク戦争にハンザが勝利した後(一四世紀後半)までの、ハンザの発展期が扱われる。第4章「一四世紀前後のハンザ貿易」と第5章「ハンザの機構および貿易と都市の態様」は、ハンザの貿易の内容や外地商館を含めたハンザの組織の解明である。第6章「ハンザの衰退」では、一五世紀以降ハンザが諸外国との関係、さらには組織の結束力などの問題でいよいよ危機に直面するようになった状況が明らかにされる。第7章「ハンザ諸都市の群像」は、この創元社版で新たに設けられた章であり、ケルンやハンブルク、ブレーメンなどの主要ハンザ都市のプロファイルからなる。そして第8章「ハンザの末路」で一六、一七世紀にかけてのハンザの衰退、組織としての消滅の過程が描かれる。終章「ハンザの文化遺産」は、いわば補論に相当し、これもこの新版で新たに設けられた章である。著者の音楽に対する並々ならぬ関心と知識とがうかがえる箇所である。

総じて、本書はたいへん読みやすい。豊富な図表も読み手の理解を深める一助となるが、旧版と同様、出典は明示されていない。

巻末の参考文献欄では、ドイツ語文献を含めたハンザの主要文献に著者の短評が付されており、選書の際の参考となるであろう。ハンザを総合的に扱った我が国で唯一ともいえる概説書として本書を薦めたい。

(谷澤 毅)